



## 戸田義郎先生 : 人と学問(戸田義郎博士記念号)

黒田, 全紀

---

**(Citation)**

国民経済雑誌, 132(4):108-120

**(Issue Date)**

1975-10

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/00171936>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00171936>



# 戸田義郎先生一人と学問

黒 田 全 紀

## I

ふつうの場合、退職される教授については退官記念講義というものが行われ、数十年にわたる学問研究の成果が集約的に披瀝されるとともに、日頃あまり表明されることのなかった研究上の苦心なども併せ語られることが多い。しかし、戸田義郎先生は退官記念講義を行われることもなく神戸大学を去って行かれた。このたび先生は神戸大学経営学部教授として御退官になった（それは昭和47年3月）のではなく、神戸大学長としての任期満了により退職されたのである。

先生は、米三郎・とく（通称千代）御両親の第4子・二男として明治42年2月24日大阪市西区新町通1丁目31番地で御生誕、令弟が数え年10才で夭折された後は安定した中流商家の末子的存在であった。大阪市立西六（さいろく）尋常高等小学校時代先生は「賢い子」という印象を周囲に与えておられたようで、事実母堂の御配慮による知識源から4年生の終り頃既にローマ字の読み書きができるようになっておられたという。大正11年先生は私立大阪大倉商業学校の入学試験に3番の成績で合格されている。受験者約1,200名中合格者71名という難関であった。この学校は第2次世界大戦後崩壊した大倉財閥の創設者大倉喜八郎が明治40年設立した商人養成のための少数精鋭主義を標榜する学校で、当時既に名門中の名門として認められていた商業学校であった。ちなみに後に神戸高等商業学校、東京商科大学へ進み大学卒業後母校神戸商業大学に帰られ、新制神戸大学では経営学部へ属して保険論を担当された故白杉三郎博士はこの学校における戸田先生の4年先輩の学力、品行、健康3拍子揃った逸材であった。わが戸田先生の方は、時に無邪気な校則違反を犯されたようであるが、学

業成績面では3年以後首席を維持されていた。先生は「私が大倉商業から受けた影響は極めて大きい」と述懐しておられる。大倉商業では「温良恭謙、質実剛健、誠心誠意、報本反始」を校訓とし、生徒に人格形成の具体的目標を示すとともに、学習態度の教示をも与えていた。この校訓を前提とした少数精鋭主義教育が先生に与えた影響の主なものとして先生はつぎのようなことを挙げておられる。「The 3R's, 読み、書き、算盤」という商人に必要な基本技能の直截・簡明な表現のうち第一の「読み」については英語教育が先生に与えた影響が挙げられる。英語を通じてギリシア古典神話、Charles Lamb, *Tales from Shakespeare* や Business English に親んだり、英語による表現力増進を期するかたわら、通信教育によって英習字の本格的練習にも励まれたという。そのため在上海時代も躊躇することなく外人書店を訪れて欧文文献を漁ることができたし、渡欧直後も英語力を活用して平然と一人旅をすることができたとも述べておられる。第二の「書く」ことについても、先生御自身はあまり関心がなかったようであるが、数学、英語、簿記は例外として地理でも物理でも化学でも修身でも筆でノートを取り、試験答案を書くべしという異常な校規が書くことに慣れさせ、メモや記録をとることを「苦」にさせなくなる。この「書く」ことへの慣れを生んだ教育の効果は学長在職時も先生が仕事の処置や会議の内容につき信頼できるメモをよく作れたという形で現われてくる。ちなみに、神戸大学本部の門標は先生の筆になるものである。第三の「算盤」は先生の得意とするところであった。「書く」と併せてこの「算盤」教育が先生に与えた影響はまず簿記の担当者としての要件の一つが満たされたことにある。「算盤」教育の効果は学長在職時代に大学予算の要求や配分、教職員組合の要求等の理解や、それらへの対応のための参考資料の作成・提示にあたってもまた発揮された。さらに大倉商業の校訓「質実剛健」は身体の鍛練を強調し、先生が学長事務取扱から学長の職を通じての6年間、必ずしも完全な健康状態を維持されたとはいえないけれども、病欠欠勤もなく、休暇も返上し、休日でも自宅で公務を処理されることのできたのは大倉時代の身体の鍛練に依存するところが大

きい。職責の重要性が精神の緊張を生み、これが、大倉時代の身体鍛練の効果を発揮させたのであろう。

## II

昭和2年3月この大倉商業学校を卒業された先生は同年4月神戸高等商業学校に難なく入学された。神戸高商は旧制中学卒業者はもとより（予科第一部）、故水島鏡也校長の創案によって学則上予科第二部を設け商業学校卒業者にたいしても門戸を開いていた。「商業学校出身者にしてこの道が開かれたことによって志を達し、後年学界の重鎮となった人々もすこぶる多い。ちょっと考えても、丸谷喜市、飯島幡司、高垣寅次郎、花戸竜蔵、坂本弥三郎、五百旗頭真治郎、加藤由作、赤松要、生島広治郎、林健二、白杉三郎、古川栄一、新庄博、古林喜楽、野村寅三郎、木村和三郎、一谷藤一郎、富永裕治、傍島省三、山田一雄、宮下孝吉、北野熊喜男、家本秀太郎等々の諸博士<sup>1</sup>」がおられ、うち丸谷喜市、花戸竜蔵および古林喜楽博士は神戸商業大学、神戸経済大学ないし新制神戸大学の学長職に就かれた。戸田先生もそのお一人である。この予科第二部に入学した学生はおおむね質実で、こつこつ勉強する気風を持っていたというのが先生も「勉強の方は……どの科目が好きであったというものもなく、特に力を入れて勉強したものもないが、ただ真面目にやっただけだ。」と述懐しておられる。神戸高商時代について先生の御記憶にあるのは、六甲を縦横に歩きまわったので大倉以来の歩くことによって得た健康作りをなお継続することができたことであるという。思うに先生は孤独をこよなく愛するタイプの学生だったのであろう。これまた大倉商業で受けられた影響の一つの現れであるのかもしれないが、その校訓の一つに「誠心誠意」があった。それが努力主義志向や強い責任感の自覚とつながることはいうまでもないが、それに拍車をかける働きをしたのが例の少数精鋭主義であった。校則は厳格にその履行が監視され、71名の入学者が卒業時には45名に減少していた事実にみられるように生徒数も

1 平井泰太郎「水島鏡也」,昭和34年,日本経済新聞社,167ページ。

少ないから監視の眼もよく行き届き違反者には他校より厳しく責任をとらせることに誇りをもつという姿勢が大倉には顕著であったという。しかしそれを誇るということは孤高を持することにつながってゆくであろう。先生は誠心誠意・少数精鋭主義教育の良さを身につけた模範生であるとともに、その悪さをも身につけた非社交的な人間に自らを作り上げて行かれたのではなからうか。予科1年を終了し、本科2年の終りにゼミナールの選択をする時が来る。先生はここで某教授のゼミナール入りを決意される。しかしそれとでも「科目そのものよりも、人づてに聞いたお人柄に惹かれて」のことであったという。けれども、その年昭和5年昇格間もない神戸商業大学の入学試験に合格されたので、ゼミナール入りは実現をみず、神戸高商第3学年卒業となる。

神戸商業大学へ進学されたのは、「手近なところに大学ができた（昭和4年昇格）ので大学進学への希望をかきたてられたのと、同じ進学をするのなら東京商科大学よりも母校神戸高商から昇格した方という気持があったからである」と先生は述べておられる。先生の大学進学が先生の高商最終学年に進もうとされる年の前年に母校が大学に昇格したということに動機づけられていて、それを「偶然」と呼ぶことにしても、その偶然が先生のその後の人生の方向を決定づけることになった。故平井泰太郎博士と先生の encounter がそれである。先生は博士によって「学問の研究と人間形成への指導」を受けることができたのであり、東亜同文書院大学から神戸経済大学付属経営学専門部を経て神戸大学経営学部へと先生の研究・教育活動の途を拓いておかれたのも博士であった。さて先生が商大に進学されたのは1929年から爆発した世界恐慌の前年であり、第一次世界大戦の敗戦国ドイツが「合理化運動」によって経済の復興に専念している時期でもあれば、アメリカが戦後の反動的不況から脱出するため大統領フーバー提唱の「無駄排除運動」を強力に推進している時期でもあった。同様に戦後の不況を克服するのに努力を傾注していた日本においても、これらの運動の影響を受けて「産業合理化運動」の声が昂まりつつあった。その間にあって平井博士は「産業合理化図録」<sup>2</sup>の刊行を引受けられ、大学1回生ゼミナリス

テンを動員して、その編集にあたられた。戸田先生は動員されたゼミナリストンのいわば外員という形で事業に参加され、一部の図表の作成、原稿の下書きならびに全篇の原稿校正、索引の作成を担当された。先生は、「前者で論文を書くことの楽しさを教えられ、後者で産業合理化の諸問題について網羅的に知識を持つことができ、同時に問題に興味を覚えさせられた」と回想しておられる。先生は、その頃既に、平井博士の人柄と博士が説き当時漸く日本でも研究の火が燃え盛ろうとしていた経営学の持つ新鮮さと、産業合理化の知識を通じてその内容の一部を垣間見ることのできた経営学の魅力に誘われて平井ゼミに入ろうとひそかに決心しておられた。そこで昭和6年大学2回生ゼミが募集される、とき、先生は直ちに平井ゼミに申込み、登録される。平井ゼミの2年間先生は「同期生に故丹波康太郎教授（神戸大学経営学部教授）、故菊沢謙三教授（山口経済専門学校教授）を持ち、1期生ゼミには故山下勝治教授（神戸大学経営学部教授）、坂本安一教授（県立神戸商科大学名誉教授）、岡田吾郎教授（前和歌山大学経済学部教授）、3期生ゼミには久保田音二郎教授（神戸大学名誉教授）等の俊英が居られたので学問的にも人間的にも啓発されるところが多く、それのみならず今日に至るまで変らぬ友情を与えられているのは誠に幸福」であると述懐しておられる。「産業合理化図録」編集に参加するかたわら、先生は弁証法、唯物史観経済史、マルクス主義経済学の勉強と、他方経営学の勉強をしておられた。マルクス主義経済学の研究は先生の近著「簿記新論」における借入金利息の擬制費用性の根拠づけのなかに生かされているのを見ることができる。経営学の方ではゼミナール第1年目は経営学方法論をテーマに選び、丁度その年昭和7年に刊行された故中西寅雄博士の「経営経済学」を対象とした報告を行っておられる。そうしてやはりこの年神戸商大に招聘されてこられた古林喜楽博士の御指導のもと課外に出版後日も浅い Nicklisch の経営経済学第1分冊を読んでおられる。これは先生に深い印象を与えたようで、爾來先生は古林博士にたいして、平井博士に次ぐ恩師という感情を抱かれるようになった。

2 昭和7年、春陽堂（普及版、昭和9年）

ゼミナール第1年目の終る春の休暇を活用して先生は商業研究所（現在の経済経営研究所の前身）の懸賞論文に応募され、割賦販売の定義をテーマとした「割賦販売の研究」を提出される。結果は三等上受賞となったが、これは当選論文中最上位の一つであった。この論文が契機となって先生の提出された卒業論文が「割賦販売の研究第二部」であって、先生はそこで唯物弁証法に立脚する史観をもって割賦販売取引形態の成立・発展を説かれたのである。神戸商大の講義のなかで先生は平井博士の「簿記原理及帳簿組織論」に感銘されたという。意外なことであるが、「簿記が不得意であった」先生に簿記の持つ面白さへ眼を開かせたのもこれまた平井博士だったのである。かくて昭和8年先生は神戸商大を卒業される。

### III

先生は大学卒業後の進路は学界と定めておられたので、研究生として機会を待つことにされた。ところが、同年4月会計学の集中講義のため九州帝国大学に赴かれる平井博士に先生が随行されたところ、博士が既に話を進めておられた上海の東亜同文書院から、先生は月末までに赴任されたい旨の入電があった。先生は直ちに赴任を決せられる。帰阪して赴任準備をする時間がなかったので、直ちに長崎経由で上海へ向われる。もちろんトランク一つの軽装である。先生の驚かれたことに、東亜同文書院（当時は専門学校）では1年の商業簿記、3年の会計学、4年の会計監査の担当を命ぜられた。先生は経営学を担当されるつもりだったのである。会計学は Fritz Schmidt, Eugen Schmalenbach 等の学説につきノート講義、会計監査は Stephen Gilman, *Analysing Financial Statements* を選び外書講読調講義をされたという。

翌昭和9年から先生の本格的な研究活動が始まる。先生は研究テーマを中国固有簿記に求め、中国人・ヨーロッパ人の書店をしらみつぶしに訪ね新刊書たと古書たとを問わず資料を求め歩かれた。そうして発表されたのが論文「中国簿記の検討」である。しかし、先生の意図は中国固有簿記の紹介・解説

よりもその計算機構の底に流れる基本的計算思考・形式を解明することにあつたので、「一篇の論文で尽してしまつた」ように思われた。が、続く問題の所在を求めて資料漁りをしておられたとき、とある小さな中国人の書店で中国の記帳単位の研究にかんする小型の薄い書物を拾い出すのに成功された。そのときの嬉しさを先生は「天にも昇る心地」と表現しておられる。既に中国語の読解力も備えておられた先生が読み出されると、当時日本で唯一の中国簿記会計にかんする有本邦造教授の大部の専門研究書の内容とよく似た個所のあるのにすぐ気がつかれた。照合されてみると後者が前者の翻訳であることが判明し、先生は啞然とされると同時に先生自身その中国書の中から、独自の発見をしようと意気込まれた。その結果発表されたのが論文「支那に於ける貨幣制度と企業会計との交渉」である。補助貨幣の相場が日々変動するという状況であつたから、先生の研究は貨幣価値変動会計研究に到達すべきものであつたが、先生は中国簿記や会計の研究を先生の研究の主役から外してしまわれ、先生が本来の研究畑と考えておられた経営学に帰って、中国における企業経営の研究をテーマにすることとされる。着手されたのは、中国の近代工業の第一である綿紡織業の研究であつて、その手がかりが天津南開大学の方顯廷教授著 *Cotton Industry and Trade in China* の味読であり、先生はその邦訳を志されるのであるが、某教授の示唆もあつて結局実現を見ない。先生が力を入れて書かれたのは論文「支那紡績会社の経営について1—4」であり、その方法論的基礎を先生は有沢広己・阿部勇共著「産業合理化」中紡績業にかんする研究に求められた。さらに中西寅雄著「経営経済学」に依つても財務問題の持つ重要性がよく浮び上つて来ないことに不満を感じ、古林喜楽博士の名著「経営労務論」を方法論的基盤に置きながら、中国の労働および賃金についての研究業績をつみ上げられて行く。

労働と賃金にかんする先生の研究は東京帝国大学のマルクス主義法学者平野義太郎教授の注目を惹くところとなつたという。また「現代支那講座第五講」で先生が執筆された「工業」を九州帝大での講義中称賛した尾崎秀実が満鉄東

亜経済調査局嘱託として中国に居り、先生を招待しようとしたことがあった。先生は何となく面倒でこの招待を断ってしまわれたが、もし受けておられたならば、後の尾崎秀実の運命を考えると、先生自身もどうなってしまわれたかわからないであろう。さらに、先生の当時の研究を常に参照・批判しつつ研究を進めて行ったのが後の京都大学会計学担当教授岡部利良博士であると聞く。先生が行われていたのは実態調査を包摂する記述的ならざる科学的中国産業・経営研究だったのである。なお、忘れてならないことであるが、阿片戦争における清国の敗戦による上海開港 100 周年を記念する東亜同文書院大学（昭和14年昇格）東亜研究部企画事業の一環として先生は上海工業発展 100 年史を執筆された。これを出版すべく先生は原稿を東京のある出版社へ送られたのであるが、それは空襲のため灰燼と化してしまった。先生はこれを学位論文の柱とすることを考えておられたのであるが、日本敗戦後先生が帰国されてみると神戸ではあまりにも文献資料が少なく、再現不能と判明し、遂に日の目を見ることがなかった。

日本の敗戦は先生の人生における第一の非常事態を意味するものであった。（第二のそれは令夫人の病状悪化、第三は故山下勝治博士の御発病、第四は御息の病氣と先生はいわれたことがあるが、大学紛争がこれに加わるであろう。）先生は昭和19年初頭東亜同文書院大学厚生課の実質的責任者となっておられた。そこでも先生は例によって全力投球の姿勢をもって任務の遂行にあたられる。困難な食糧事情のなかでの寮生のための生活資料の確保、学徒出陣等がもたらす諸問題への対応に日夜奔走しておられたとき、日本は敗戦する。しかし、戦後も教職員および学生の一部が残り、加えて現地除隊の学生が帰学する。食糧問題は当然深刻化する。病人のために苦心の末軍から提供を受けた薬品は乱れた治安状況の中では、それを隠蔽するのがこれまた大変な苦勞であった。gown と town の争いに非ずして学生が戦勝国民中国人と争うようなことは必死に阻止しなければならぬ。このような厚生課の仕事の中で先生は覚えざるをえずして酒の味を覚えて行かれたという。先生がその非社交的性格を打破されたの

は——完全にであるかどうかはともかく——この酒のお蔭であった。

#### IV

やがて昭和21年3月(?)をもって東亜同文書院大学は廃学となり、先生は同年4月帰国される。それは、全蔵書を現地に残さざるをえないという情勢下、文字通り身柄一つでの奇しくも赴任時にも似た御帰国であった。先生を待ち受けていたのは、平井博士の発案により設置が内定していた神戸経済大学付属経営学専門部創立準備委員としての仕事であった。先生は竹中竜雄神戸大学名誉教授と協力して学則作りをされる。講義では本科3年の経営学および専攻科の計録理論を担当される。

当時の先生の研究業績としては著書「中国工業労働論」を挙げることができる。これは中国経済にかんする経営学的研究の開拓者たる先生が中国における工場制機械生産の方法を採用する工業経営の労働をめぐる諸問題の解明を目的とし主としてそれまでの研究をまとめられたものであるが、当時既に膨大な近代工業生産力、したがって労働力を支配していた中国共産党下の近代工業労働を検討する終章が先駆的研究として光彩を放っている。

「中国工業労働論」の刊行は時あたかも神戸大学経営学部創設時に符合する。先生はもちろん経営学部創設に協力される。いろいろの経緯があったと聞くが、先生の場合は没我主義正攻法の姿勢で貫かれている。日本で最初に経営学部が発足し、その講座組織再編成時に、先生は故林健二博士に講座担当者として適任であるから簿記を担当するよう勧奨され、これを受けられる。以後先生の途は簿記一筋である。

研究テーマの選択には苦勞されたと聞く。が、アカウンティング・プロセスにかんする一連の論攻がある。これらは経営学におけるいわゆる過程研究にその着想の根を有する。勘定理論を計算と狭義記録(=計算を内容としない記録)という簿記の任務の達成との関連において検討するとき必要な指標たる客観性が生じるのは計算過程からのみであって、記録過程に客観的秩序を求め

することはできず、簿記および簿記手順は一定の統合目的のもとに整理された計算および計算手順の影響を受けて初めて客観性を獲得し、そこに簿記機構が確立し、勘定理論が成立することが明らかにされる。これらの論攻は後の学位論文の特徴的部分を成すことになる。

先生は「会計学」の講義を担当されたこともある。その時採択されたテキスト故山下勝治博士著「会計学一般理論」を先生は精密に研究され、簿記も山下理論によって組立てる必要があると痛感されたと聞く。それが大著「簿記」さらには特に近著「簿記新論」において遺憾なく具体化されて行く。先生は会計学は会計学、簿記は簿記というように安易に考えることのとうてはできない人なのである。同時に先生は自らを会計学における神戸シュレーの一人としてアイデンティファイされる。

先生は自らを評して「よく工夫をする」と述べておられるが、極めて熱心な学生の教育にもそれが現われていた。先生の講義は、率直に言って、面白いとか楽しいと単純に言い切ってしまうものではない。しかし、よく工夫され、学生に理解させようという気迫に満ちたものであった。また、先生が公認会計士第2次試験委員として「簿記」の出題をされたときも、問題がよく工夫されていたからであろう、一説に「詰将棋のごとし」という批評があった。批評は「練習をやっている者には容易だ」から「さしてむづかしくない」を経て「かなりむづかしい」にわたる。しかし、先生にすればオーソドックスさを求められたにすぎなかったとしても、正統派的解答が誠に少なかったために、採点結果は惨憺たるものに終わったと聞く。ここでも、先生は幾許かの皮肉を込めてであろう、「too classical でないか」と自省されていた。さらに、先生は、暑中休暇中も、商業科教員養成のため、神戸大学商業科教職講座をしばしば担当されるとともに、産業教育内地留学教師の受入指導にも積極的にあたられた。

昭和36年夏ベルリン自由大学 Erich Kosiol 教授との交換教授として先生は海路渡欧される。紅海沖でスプートニクを観望されたりして到着されたベルリンは例の壁によって東西が切断されてしまった直後であった。先生のベルリン生

活については、昨年神戸大学を訪れた現チュービンゲン大学 Marcell Schweitzer 教授がある席上「自分が識る日本人のなかで最も勤勉なのは誰か知っているか」と問い「それは Professor Toda だ」と述べたものである。教授は当時ベルリン自由大学助手として先生のよき秘書役をつとめていたのである。このような生活のあい間にも、先生は鋭い観察眼をもって彼の地の人々を観照しておられる。先生のゼミナール会誌「Roter Ochse」を飾っている「ベルリン風物誌（ベルリンの熊と犬，クリスマス，自由大学の人々，オェールマン夫人）」は、先生がただの勤勉一方でないことをよく示す暖いユーモアの横溢した文章である。それは公的生活における姿勢からは想像もつかない先生の一面を表わすものであるといえよう。在外期間中に先生はそれまでの長年にわたる地道な研究成果を集大成された論文「勘定理論の簿記理論的再検討」によって経営学博士の学位を授与されている。

帰国後も、着実な研究・教育活動のかたわら学内外の要職を全うしつつ、昭和43年4月経営学部長に就任される。細かい経緯は省略するが、同年爆発した大学紛争のさなか翌44年、固辞されたにもかかわらず、遂に神戸大学長事務取扱を命ぜられる。この間の先生は御自身も述懐しておられるように正に「記録魔」であって、先生はつぎのように回顧される。

「仮に昭和44年1—8月だけで、評議会だけでも過去3年間の回数に匹敵する回数の開催を持っているが、もしこれに部局長会議、封鎖解除実行委員会を初めとして、助手会との対応、組合との対応、学生団交をも加えるとどういう数に上るか。さらにその間、入試委員会、全学集会委員会を初めとする諸委員会出席から、国大協関係諸会議への出席を加えると……。そのように連日、会議、会議、会議。しかも一日中に2つ、3つと会議を持ち、のみならずそれら会議のための事前協議や打合せを行うという状態の中で、首尾一貫を期すること、経緯の説明を求められた場合にこれに速座に応じうること、関係法規・慣行についての質問にも答えること、これらの点に遺憾なきを期すること。つぎにこの会議や対応は『戦争状態』下のそれであって、高度の緊張を要し、油

断は許されず、隙を見せることもできず、嚴重に警戒する必要があること。そのような超非常時における記録」を先生は、事務局に依存せずみずからの手で綿密に作成して行かれた。

先生は「筋を通す」ことに万全の配慮をされ、昭和46年2月16日には神戸大学長に選出される。神戸大学はもとより、広く学界および教育界に尽した功績まことに顕著なりとして御退職後の先生を直ちに神戸大学名誉教授に推挙した大学評議会の功績調書は大学紛争が混乱の極に達し、解決の見通しがまったく得られない学内外情勢の中で、敢然として学長事務取扱の重職を引受け、混乱した学内意思の統一に連日連夜にわたり献身的な労力を払い、また身の危険をも顧みず全学集会を敢行し、学生との対話に成果を収め、最少限の物的損傷のもとに短期間に紛争を収拾し、研究・教育および行政面の正常化を達成された旨を強調している。しかし、学長事務取扱および学長の重責を荷っておられた6年間、先生は、在上海時代に肉体的エネルギーを蓄積されていたかもしれないとしても、腰痛や痛風に悩まれていた。またそれは、御病身の令夫人や御家族の協力あってこそその痛々しいともいうべき6年間であった。

先生はいま大阪学院大学商学部教授として紛争中も研究活動を休めず執筆された著書「簿記新論」の整備・拡充を考慮しておられるという。また日本の簿記書の批判的検討を志しておられる。そのため日本簿記史および勘定理論の研究が必要だと静かに語っておられた。これらの御抱負がやがて実現することを祈り、かつ信じる。

先生の尊父は「律気な努力家」、母堂は「義理堅い人」という評判をえておられたという。それは先生にもよくあてはまる。が、思うに学者たる先生はそれを含めて「没我主義、自己犠牲甘受」と表現される方向へ自らの性格を形成して行かれた。また先生は簿記をこよなく愛しておられる。そのために先生にはとかく低く評価されがちな簿記学者への評価を高めなければというお気持が常に強かった。その先生が自らを評して「性格的に反省型で自分の非を認めようとする傾向が強い」と述べられるのはともかく、さらに「人間が甘く、反撥心、

競争心が乏しい」といわれるのはむしろ先生一流の反語なのではなからうか。

小稿を書くにあたって戸田先生から貴重なメモワールを見せて頂いた上、酷暑の砌長時間にわたって御回想や御抱負を聞かせて頂きました。にもかかわらず、私にはこままでしか書けず恥じ入るのみです。まず精粗ばらばらです。とくに先生の学問について、私の無能のため、書くところが少なすぎました。他方非本質的なことを書きすぎたのではないかと恐れています。誤記脱漏や札を失している個所もあると思います。先生の人生を辿らせて頂いている間に私自身疲れ切ってしまったというのが正直なところです。無責任ですが最後に言訳を付記致します。

1975年8月10日記

#### 執筆者紹介(執筆順)

- 西川 孝治郎……………元日本大学商学部教授 商学博士  
 安平 昭二……………神戸商科大学教授 経営学修士(神戸大)  
 岸 悦三……………広島修道大学商学部教授 経営学修士(神戸大)  
 谷 端 長……………神戸大学経営学部教授 経営学博士  
 武田 隆二……………神戸大学経営学部教授 経営学博士(神戸大)  
 中野 勲……………神戸大学経済経営研究所助教授 経営学修士(神戸大)  
 黒田 全紀……………神戸大学経営学部助教授 経営学修士(神戸大)